

ハウスアダプテーション、プレイセラピーの観点から

野村みどり（東京都立保健科学大学、
子どもの病院環境&プレイセラピーネットワーク代表）

日本独特の住環境に有った機器、ロボットが開発されるべきである。

例えば、狭い住居の中で、ロボットの必要が無いときは、邪魔にならないように、椅子になるとか、コンパクトな形になるとか、階段の移動ができるとか。

介護犬や盲導犬や聴導犬についてみると、犬の世話は、障害をもつ人々にとって大きな負担であるが、ロボットは世話なし、遠慮なしであること、また、ペットとして可愛がることと、厳しく訓練することは相矛盾するが、ロボットは人間のわがままに耐える、ペットにもなれる。これらの理由から、今後、ロボットが障害をもつ人々のサポート役を担う可能性は高いと思う。

更に、電化製品として、一家に一台、マルチロボットがいると良い。その期待される役割は、家族の一員、番犬、電話番、来客対応、ヘルパー、乳母、ペット、話し相手、家庭教師、マッサージ師、防災・防犯・避難誘導係等々広範である。

動物セラピーの場合、動物の管理（病気、おとなしい、アレルギーの元にならないなど）の問題が大きいですが、ロボットの場合はその問題は小さいので、病院内に入れやすいのが利点。プレイセラピーの新しい道具として活用、発展できる可能性がある。

（聞き手・文責 小野栄一）